

論文内容要旨

Clinicopathological study on pIgR expression and tumor progression in advanced colorectal cancer

(進行大腸癌における多量体免疫グロブリンレセプター (pIgR) の発現と腫瘍進行に関する検討)

The Showa University Journal of Medical Sciences 2021 年 掲載予定

病理系臨床病理診断学 菊池 一生

内容要旨

分泌型 IgA 抗体は抗原特異的粘膜防御に関わっており、高分子免疫グロブリン受容体

(polymeric immunoglobulin receptor, pIgR) は、二量体 IgA の輸送や、分泌型 IgA の免疫機能を強化する前駆体として機能するとされている。消化管や肺、乳房、婦人科系臓器など様々な臓器の腫瘍発生や予後との関係が検討されている。しかし、進行性結腸直腸癌

(colorectal cancer, CRC) 患者における pIgR 発現は、肝転移の予後不良因子としての報告も認めるが、依然としてその重要性は不明なままである。そこで pIgR 発現と臨床病理学的因子との関係を調査した。対象は、昭和大学藤が丘病院において 2016 年から 2018 年に外科的に切除され、KRAS 遺伝子検査を受けた 47 人の進行性 CRC 患者とした。pIgR 発現は免疫組織化学によって分析され、患者は染色強度と範囲に基づいて 2 人の著者が盲目的にスコアをつけて、5 点以上を高グループ (pIgR-H) と 4 点以下を低グループ (pIgR-L) に分類した。13 例を pIgR-H 群、残り 34 例を pIgR-L 群に分類した。pIgR-L 群と pIgR-H 群においてほとんどの臨床病理学的因子に関しては統計学的に有意差を認めなかったが、pIgR-L 群は pIgR-H 群よりも静脈浸潤の頻度が有意に高かった。また、pIgR-H 群は pIgR-L 群よりも KRAS 遺伝子変異の頻度は有意に高かった。KRAS 遺伝子と pIgR の発現に関して、これまで報告はされていなかった。これらに結果に関しては、症例の偏りや数など様々な因子によって得られた偶然の可能性もあるが、今後の検討において有意な結果となれば pIgR を標的として治療法の開発が期待される。一般に、進行 CRC 患者のにおける化学療法において RAS 遺伝子の検索およびその結果による治療薬の選択が行われているが、KRAS 変異型 CRC 患者に対する治療法として pIgR を標的として治療法と成り得る可能性がある。我々の発見は進行 CRC 患者における pIgR 発現と臨床病理学的因子との関係が悪い可能性があることを示した。しかし、症例数のさらなる蓄積や注意深い経過観察などが必要である。